

取材・文中 中東生
Text Shinobu Nakai

第15回ゲザ・アンダ国際ピアノコンクール(期間:5月27日~6月5日) アンダ生誕100周年記念年はゲルツェンベルグが優勝

第1次審査は混乱?

コロナ禍で開催が危ぶまれた第15回ゲザ・アンダ国際ピアノコンクールが、紆余曲折のすえ、5月27日から6月5日までスイスのチューリヒで開催された。ゲザ・アンダは1921年にハンガリーで生まれたが、チューリヒに亡命したあと、絵画コレクター、エミール・ゲオルク・ビュールレの娘と再婚し、当地で没した。没後、3年ごとに当地でコンクールが開かれているが、才能ある若手を長期的に支えられるよう、ホームステイ型でサポートし、入賞者に向こう3年間大小の演奏機会を与えて育てている。日本人では藤原由紀乃、岩井美子、今峰由香、河村尚子、奥村友美が入賞している。

今年にはアンダの生誕100周年、そして9月にはビュールレ・コレクション公開が市立美術館新館で再開される。コロナ禍でレバトリも簡潔化したのが、国によつては審査用ビデオを撮るスタジオやピアノも借りられない状況のなか、日本人3人をふくむ44人がビデオ審査に合格した。審査委員長のネルソン・フレイレが健康上の理由で、スイスへの渡航を断念するハプニングもあったが、ゲルハ

15th International Piano Competition Concours Geza Anda

藤原由紀乃や河村尚子らが入賞し、日本人にもなじみの深いゲザ・アンダ国際ピアノコンクールだが、今年の5月末から6月にかけてチューリヒで開催された。日本人も2名が第1次審査に進んだが、さて、結果は。



優勝したゲルツェンベルグ ©Geza Anda-Foundation / Dmitry Khamzin, 2021

ルト・オピッツが代役を担った。渡航規制等の理由で、日本人一人をふくむ8人が辞退するなか、安並貴志と池邊啓一郎をふくむ36人が5月27日から3日間、チューリヒ音楽院大ホールで、3種の曲による第1次審査に挑んだ。複数の審査員は「第1次審査から入賞者は見えていた」と言うが、「第1次合格者決定は混乱



ゲザ・アンダ国際ピアノコンクールの審査のもよう ©Geza Anda-Foundation / Dmitry Khamzin, 2021

した」そうだ。全体的に速すぎるテンポや弱音が駆使できない傾向が指摘され、日本勢一人も通らなかつたが、安並を評価する声がかかれた。

ファイナルは5人

5月31日、6月1日は12人が55分のリサイタル形式の第2次審査に進んだ。一度弾いた曲はもう使えないのが難点だ。6人が挑んだ第3次審査は、コレギウム・ムジカム・ヴィンタトゥールとモーツァルトの協奏曲を弾くため、ヴィンタトゥール市庁舎内ホールでは上限50人の聴衆が見守った。「ピアノ協奏曲第20番」を弾いたチェコのマレク・コ

ザックの透明な美しい音と、同曲を、スケールは小さいがすべての音に歌心を込めて弾いた日系ブラジル人リシャルド・オクタヴィアーノ・コジマ、「同第9番『ジュノム』を若いころのモーツァルトが乗り移ったようなテンションで心底染しんで弾いた英国のジュリアン・トレヴェリヤン、哲学者のように深い表現を追求したドイツのアントン・ゲルツェンベルグが印象的だった。結果コジマ(のちにフレイレ賞受賞)以外が、6月5

日トーンハレ・マールグでチューリヒ・トーンハレ管弦楽団と共演できるファイナルに残った。

ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第5番『皇帝』」を美しい音色で弾いたコザックが第3位、バルトック「ピアノ協奏曲第3番」を一瞬も飽きさせることなくエンタテイナーとして弾き切ったトレヴェリヤンが第2位とモーツァルト賞、聴衆賞、リスト「ピアノ協奏曲第1番」と『死の舞踏』で王道ピアノイズムを聴かせたゲルツェンベルグが優勝、ハンガリー・フレイレ賞を受賞した。他、ミハリ・ペレツにリスト・バルトック賞、ギオルギ・ギガシユヴィリにアンダ夫人賞が与えられた。今後3年間の成長を見守りたい。